

ヴェーユと実存主義者たち①

村 上 吉 男

ヴェーユとおよそ同時代に生きた、フランスの哲学者や思想家たちのうちで、実存主義に与する人たちといえば、キリスト教の実存主義者ガブリエル・マルセル（1889年－1973年）、ヴェーユ作品の刊行に尽力したとされるアルベール・カミュ（1913年－1960年）、ジャン＝ポール・サルトル（1905年－1980年）とシモーヌ・ド・ボーヴォワール（1908年－1986年）であろう。マルセルに付された相貌に対し、カミュ、サルトルとボーヴォワールが無神論的実存主義者と呼ばれたことは、またカミュとサルトルがその思想的対立から激しく論争していたことは、そしてボーヴォワールが女性論『第二の性』の出版を機に、フランスのフェミニズム（féminisme）の先駆者にみなされたことは筆者にばかりか、よく知られたことである。

だがヴェーユの認識論的思想研究にとって、上記に、またこれまでに記しおいた実存主義者たちの、その思想のなかで、同時代の人とみえども、何ゆえサルトルやボーヴォワールの思想が参照されるといわねばならぬのかである。筆者がすでにヴェーユの認識論的思想は実存主義的思想ではないと断じていた以上、これを肯定するに、一度は実存主義者の思想から質し明らかにする必要に迫られたからであり、それには実存主義者のうちの、ヴェーユと言葉を交わしたとされるボーヴォワールと、ボーヴォワールを伴侶にしたサルトルを取り上げるのが適当であると判断されるからである。しかも筆者は、ボーヴォワールがサルトルと出会って以来、彼の思想を支持した人とみるからして、彼らの実存主義思想をサルトルに代表させて語ることができるだけでなく、ヴェーユが実存主義に与しないと指摘せども、筆者のヴェーユの認識論的思想分析の試みにおいて、とりわけサルトルのいう〈他者（autrui）〉に含意される一思想が、いまだ筆者に明白とはなっていない、〈わたし〉と〈魂（脳）〉の関係に対する解

決の手がかりに役立つと予想し得るからである。

二人のシモーヌ

二人のシモーヌとはもとより、シモーヌ・ヴェーユとシモーヌ・ド・ボーヴォワールのことである。ヴェーユと言葉を交わしたとされる引用文を取り出すと、それはボーヴォワールの一連の自伝的作品⁽¹⁾のうちの『娘時代』にあって、そこに筆者は両者の生きる姿勢が疾うに違うことを読み取り得る。

Cet entêtement m'empêcha de tirer profit de ma rencontre avec Simone Weil. Tout en préparant Normale, elle passait à la Sorbonne les mêmes certificats que moi. Elle m'intriguait, à cause de sa grande réputation d'intelligence et de son accoutrement bizarre; elle déambulait dans la cour de la Sorbonne, escortée par une bande d'anciens élèves d'Alain; elle avait toujours dans une poche de sa vareus un numéro des Libres propos et dans l'autre un numéro de L'Humanité. Une grande famine venait de dévaster la Chine, et on m'avait raconté qu'en apprenant cette nouvelle, elle avait sangloté: ces larmes forcèrent mon respect plus encore que ses dons philosophiques. J'enviais un cœur capable de battre à travers l'univers entier. Je réussis un jour à l'approcher. Je ne sais plus comment la conversation s'engagea; elle déclara d'un ton tranchant qu'une seule chose comptait aujourd'hui sur terre: la Révolution qui donnerait à manger à tout le monde. Je rétorquai, de façon non moins péremptoire, que le problème n'était pas de faire le bonheur des hommes, mais de trouver un sens à leur existence. Elle me toisa: 《On voit bien que vous n'avez jamais eu faim》, dit-elle. Nos relations s'arrêtèrent là. Je compris qu'elle m'avait cataloguée 《une petite bourgeoise spiritualiste》 et je m'en irritai, comme je m'irritais autrefois quand M^{lle} Litt expliquait mes goûts par mon infantilisme; je me croyais affranchie de ma classe: je ne voulais être rien d'autre que moi.⁽²⁾

わたしの、この頑なさがシモーヌ・ヴェーユとの出会いを無駄にさせてしまった。彼女は、高等師範学校への進学準備をしながら、ソルボンヌ大学で

わたしと同じ教科修了試験を受けていた。彼女の、頭の良さと奇妙な身なりとで大評判のために、わたしは彼女に興味を持っていた。彼女はアランのかつての生徒たちだった仲間に守られては、ソルボンヌ大学の中庭をぶらついていたし、いつもマントのポケットの一方に《リーブル・プロボ》紙とその他方に《ユマニテ》紙を入れていた。大飢饉が中国を襲ったところであった。この報を聞いて、彼女は嗚咽したという話だ。その涙はわたしに、彼女の哲学的な資質のことより以上に、尊敬の念を抱かせた。わたしは世界全体に達して闘い得る勇気を羨んでいた。ある日わたしはうまく彼女に近づくことができた。会話がどのように始まったかはわたしには思い出せない。彼女は断定的な口調で、あらゆる人間に食物を与え得る革命こそ、今日地上で唯一大事なことであるといった。わたしも断固たる調子で、問題は人間たちの幸福を作り出すのではなく、人間たちの存在に意味を見出すことにあるといい返した。彼女はわたしをじろっとみながら、《あなたは一度もお腹をすかせたことがないのが分かるわ》といった。わたしたちの関係はそこで終わった。彼女がわたしを《観念論的小市民階級》の人間に分類したことを知り、わたしはそのことでいらいらした。昔、リット嬢がわたしの好みを幼いと明かしたときに、いらついていたと同様に。わたしは自分の階級から解放されたと思っていたし、わたし以外の何ものでもありたくなかった。

ボーヴォワールの誕生から21歳頃にサルトルに出会う時期までの回想である『娘時代』に、上記引用文のごとき一段落を用いヴェーユとの一齣を書き残すは、むろん自伝が精細な記録に基づかねばならぬゆえに当然であるにせよ、筆者には後段でも触れる通り、ボーヴォワールをしてヴェーユを過大評価せしめた感が否めないと受け止められるほどに、ヴェーユへの意識が過剰に反応していた証しであると察知される。それはボーヴォワールにすれば、同世代の、同じ学び舎の女性として活躍できるヴェーユを認めてかまわぬにもかかわらず、自分にはない、「生きる姿勢」の、要は思想の持主に出くわし、この同性の存在の出現での気後れや途惑いと、自らの〈頑なさ〉からくる反発とをみせるかと思いきや、羨望のまなざしがなくともいわせない、複雑な心境にしかなかった

と読み取らせ得るからである。だからここで筆者が明らかにすべくは、たとえばポーヴォワールがサルトルを知った頃やそれ以降の、この両者の生涯を語ることにあらずして、二人のシモーヌが出会った当時の、または出会う以前での「生きる姿勢」(思想)を上記引用文や他の引用文の利用にて比較し、もってその相異をサルトルの思想に代表させて確認することだけにあると再度断わっておかざるを得ない。

ポーヴォワールは引用文として上記した、その段落の冒頭で、漸くヴェーユに出会得たのに、何も得るものがなかったと結語し、それをしていらいらを募らせるだけであったとも記す。そうなのはなぜかに、自らの〈頑なさ〉が原因だと述懐するが、これについては、彼女が上記引用文の直前の段落最後に書き残す文章を参照させなくてはなるまい。すなわち、

Je continuai à subordonner les questions sociales à la métaphysique et à la morale: à quoi bon se soucier du bonheur de l'humanité, si elle n'avait pas de raison d'être? ⁽³⁾

わたしは社会問題を形而上学や道徳の下位に位置づけ続けていた。人間の幸福を気にかけて何になろう、もし人間に存在理由がなかったならばだ?

最初の引用文から、二人のシモーヌの出会いの日時を推定すれば、そのいつかはヴェーユでは18歳時の7月以降より19歳時の5月にかけての、ポーヴォワールでは19歳か20歳頃のことになろう。そこでポーヴォワールにとって、あの〈頑なさ〉がこの年齢頃に生じた拘りなのか、また何のためにあったかを聞き質す際、上記した両方の、とりわけ二番目の引用文に窺えるように、このとき一方のヴェーユをして、はじめてにしる労働運動に参加させていたのとは相違して、少なくともこうした〈社会問題〉に向けられることがないと知り得る。このことを次に掲げる引用文も証しくる。

Mais ma sécurité et mes confortables illusions me rendaient insensible aux

problèmes sociaux. J'étais à cent lieues de contester l'ordre établi. ⁽⁴⁾

だがわたしは（それなりの生活の）安定と自らの心地よい夢想とで、社会問題に対しては無感覚だった。わたしは既成の秩序に逆らいはしなかった。（括弧内は筆者）

およそ14歳時のことを回顧し書かれた上記引用文から最初の引用文に示唆させた年齢時までの期間、ポーヴォワールは〈社会問題に対しては無感覚〉であったことになる。要は彼女が14歳より19歳か20歳に至る数年間、〈社会問題〉にいわば無関心な姿勢を貫くそれ自体は、彼女の〈頑なさ〉の一因をかたちづくるというてよかろう（これは〈社会問題〉に無関心な姿勢にさせた〈頑なさ〉もあろうといわせることだ）。そしてこの一因は彼女がサルトルに出会い、彼の思想に触れ賛同することで完全に消失させられるとみる。なぜなら彼の主張しよう〈投企（projet）〉や〈参加（engagement）〉なる思想は彼女の眼を〈社会問題〉に開かせざるを得なくし、彼女自身が提唱したかどうかはともかく、フランスのフェミニズム（féminisme）に与する一人として活躍し出したことでも、〈社会問題〉にかかわらずにおれないといえるからである。つまり、

Dans mon milieu, on trouvait alors incongru qu'une jeune fille fît des études poussées; prendre un métier, c'était déchoir. Il va de soi que mon père était vigoureusement anti-féministe. ... Je n'étais pas féministe dans la mesure où je ne me souciais pas de politique: le droit de vote, je m'en fichais. Mais à mes yeux, hommes et femmes étaient au même titre des personnes et j'exigeais entre eux une exacte réciprocité. ⁽⁵⁾

わたしの階層では、当時、娘が大学教育を修めるは愚かなこととされ、職業に就くは身を落とすことであった。父が大変な反フェミニストであったはいうまでもない。... わたしは政治に関心を寄せる、フェミニストではなかった。婦人参政権はどうだってよかった。だがわたしにとって男も女も同じ資

格で人間でなくてはならないため、わたしは両性間に完璧な相互性を求めていた。

筆者がヴェーユに対し、以前「当時の女性の生き方としてまれとみてよい」⁽⁶⁾と語ったことは、上記引用文中の前半を読めば納得できよう。当の引用文はボーヴォワールも父親の父権的かつ世間的常識を覆し、学生たる気分を満喫する18歳の時期に記されるにせよ、しかしヴェーユを加えていう、二人のシモーヌはこの風潮の社会に抗するフェミニスト（女性）たらんとした思いで進学したと断じてはならない。この引用文での後半が示唆するように、少なくともボーヴォワールにとっては、フェミニスト（女性）として進学したところでの、一つの社会進出が可能になったとみられども、本人が〈婦人参政権〉を例にした〈社会（政治）問題〉さえ考慮せずにいたのであれば、真に社会参加を試みようとするフェミニスト（女性）ではなかったにちがいない。そこではたんに、彼女が女性の地位（これも後述する通り、他の女性（たち）というよりか、自分自身の地位）を男性と同等に向上させんと願うフェミニスト（女性）としてしかなかったことを証しする。だから社会〈参加〉するフェミニスト（女性）たる目覚めもサルトルに出会ってからといえるやもしれぬ。これに比べ、ヴェーユの「生きる姿勢」の方は〈男も女も同じ資格で人間でなくてはならない〉、その〈相互性を求めていた〉ことでは同様であっても、自分のことを越えて、人間（たち）の〈社会問題〉に立ち向かっていたということである。

とまれこうした一フェミニスト（女性）として、ボーヴォワールは何をめざしていたのかである。筆者がこの答えを導くに当たって検討すべきは、先きに掲げた諸引用文中の次なる文章である。取り出され得る文章は順次、〈人間の幸福を気にかけて何になろう、もし人間に存在理由がなかったならばだ？〉、〈問題は人間たちの幸福を作り出すのではなく、人間たちの存在に意味を見出すことにある〉と〈わたしは自分の階級から解放されたと思っていたし、わたし以外の何ものでもありたくなかった〉となる。三文章のうち、最後だけが彼女自身を、他は彼女を除いた〈人間（たち）〉をさすと捉えられる。なぜなら、最初の文章での〈人間〉（次の主語人称代名詞 elle も含め）は〈l'humanité〉

の訳であれば「人類」とも換言できる、総称の謂で用いられるからであり、またこのいわば個人と〈人間たち（集団）〉のことは彼女にすれば、〈わたし〉の問題と〈社会問題〉に、筆者にすれば、〈社会問題〉は「他者」の問題に替えて問うことができようからである。

上記にいう〈わたし〉個人の問題は、ポーヴォワールが14歳のときより数年間、〈社会問題（他者）〉に関心を譲ってはならない、自らの〈存在理由〉の問いかけにあったのであり、この〈わたし〉の〈存在に意味を見出すこと〉に固執すればするほど、筆者はそこに彼女の〈頑なさ〉の真因がみられると察知し得る。つまり「〈頑なさ〉が何のためにあったか」は彼女自らの〈存在理由〉を求めることにしかなかったわけである。すると、何より〈わたし〉の〈存在（être または existence）〉を問題にしているサルトルと出会い、彼の思想に私淑していくまでもなく、彼女が自らの存在を〈気にかけて〉いたとされる以上、彼の思想に関した素地を疾うに持っていたといわねばならなくなる。だから彼女は彼の思想に「賛同」し得たと筆者に語らせたのである。ただこの時期の彼女にあって、〈存在〉の語には〈existence〉や〈être〉が長い引用文に見出されるが、〈existence〉の方はまだ邦訳の「実存」の意味で用いられてはいない。この点はサルトルの思想の影響を受けた証しになろう（たとえ邦訳ででもだ）。

ところで筆者にとって、ポーヴォワールが〈存在理由（意味）を見出す〉べき執心さは自らのそれに対してだけ、その通常ではない度合の、意固地なまでの〈頑なさ〉に達していたとみえるからして、およそ〈頑なさ〉が彼女にかぎらず、しかも年齢にかかわらず、誰にでも見受けられるにしても、彼女の場合はいささか問題無きにしてもあらずといえよう。なぜ問題を生じさせたかと推し量り得る私見は後述に譲るが、ここで、彼女が自らの〈存在理由（意味）〉の希求に拘泥するについては、〈もう一方では、わたしは幸福を知っていたし、幸福をたえず欲していた〉⁽⁷⁾にほかならなかったからだとして記しておく。自らの〈存在〉を〈頑な〉な決意でもって長い期間を貫き通してまで発見しようとする試みが〈幸福〉を自らに呼び込むためであったと筆者にいわせるは、あたかも自分以外のことに考えが及ばないことを示唆させるがゆえに、〈社会問題（他者）〉たる〈人間（たち）の幸福〉が後回しに、なおざりにされるは当然のこととなる。だ

からヴェーユに、ポーヴォワールが〈近づ〉き、その思想の一端を聞いては、会う以前から〈興味を持〉っていたり、かの〈涙〉したという伝聞で〈尊敬の念を抱〉いたりしたことを真に受け止め得る以上に、驚愕し圧倒されてしまったとみて間違いなからう。なぜならここでも、自分の思想と対峙しよう「生きる姿勢の、要は思想の持主」に出会ったと繰返すことができるからである。

『娘時代』はヴェーユの死後15年を経て刊行された。ヴェーユに関しても私的印象の記録に感じられるために、筆者にはポーヴォワールがその覚え書を残し、これに基づき記したように思えるし、すでに実存主義者の立場に立って、脚色した感があるのも拭いきれないが、そこのところは今定かにならない。この覚え書に従われたか、その立場で語ったか否かにかかわらず、筆者は書かれた通りに読み取らねばならなくなる。だがそうだとすると、筆者がすでに記した語（句）はポーヴォワールの引用文中の奈辺をさしてくるのかをこら返りで指摘しておく必要がある。まず、「過大評価」との筆者の表記に充当するは、ポーヴォワールがヴェーユを〈頭の良〉い、〈哲学的な資質〉に恵まれた人と書いたことにある。しかれども初対面の人に対しては、外交辞令であろうと礼を失しない語り方が常に要求され、彼女にその落度がなかったにみえるにかかわらず、たとえば、ポーヴォワール自身がこうしたうわさを一度の会話で真に見抜き得るならいざ知らず、ヴェーユが筆者のみる独自の哲学を疾うに展開していたか、要はいかなる〈哲学的な資質〉を土台にした思想（哲学）を有するのかが当時は誰も分からぬのだから、彼女の表現はこれを確かめないままでは大げさに捉えすぎてある、また確認は自らの思想の否定に繋がるということである。ちなみに、ヴェーユは〈大評判〉となるほどに、しかも事実頭脳明晰であったにしろ、この会話のときも不断も、自らの主張を〈断定的な口調で〉述べようとするだけで、〈頭の良さ〉をひけらかすような人でなかったし、〈仲間を守られて〉〈ぶらつく〉をかりに「仲間を引き連れて」「闊歩する」ごとき謂を与える語句に換言しても、〈仲間〉を付き従わせる地位（身分）に恋恋と執着しようとする人でもなかった。〈仲間〉が彼女に付いてくるのは、彼女が〈奇妙な身なり〉でたえずいたためであり、この彼女をからかうか、面白がるかしたからであるにすぎなからう。しかしこれらのことはヴェーユには厭味に聞こえよう

が、どうでもよいことであつたと筆者にいわせ得る。

そして、ヴェーユに出会つた際、《観念論的小市民階級》の人間に分類されたことが〈リット嬢〉の例も含め、ポーヴォワールに〈いらいら〉させたは、また同様に筆者にいう「気後れ」「途惑い」や「反発」をばヴェーユにはじめて出会えた嬉しさ、期待や不安の気持ちから生じる各「過剰反応」と一見させたは少なくとも彼女の性分を短気と捉えずば、何によるか。それはおよそ14歳からヴェーユとの会話までの期間に引き摺られていた焦りにあつたように推察される。ヴェーユより一つ年上の彼女は理想（観念）的な〈幸福〉感を自らの〈存在理由（意味）〉にみつけるにいまだひたむきであつた時期に、このいちずさが〈リット嬢〉の指摘した〈幼〉さにあるか否かはともかくも、彼女の目前に、〈あらゆる人間に食物を与え得る革命〉が〈今日地上で唯一大事なこと〉として、彼女には無関心であつた〈社会問題（他者）〉に首を突っ込んでいたヴェーユが現われては、ポーヴォワールがヴェーユを同性の競争相手にみたならなおさら、この相手に負かされてしまうような気分にはさせられないではおれなくなる。つまり自らにない思想で〈行動〉し、特異な雰囲気を出そう相手を前に「気後れ」し、何を返答すべきか「途惑い」、それでもヴェーユの言たる〈あらゆる人間（たち）〉に引っ掛けてか、自らの〈存在理由〉を〈人間たちの存在に意味を見出すこと〉に置換させた感のある、この言たる「反発」を示さないではおれなくなるということである。

だがポーヴォワールがヴェーユと会話したとき、自己の〈存在理由（意味）〉をみつけ得ないでいたし、それでもって焦っていたと判断するは何ゆえかである。彼女が〈わたし以外の何ものでもありたくなかつた〉と述べるにあつて、これは、なるほど彼女自らの〈存在理由（意味）〉を示唆させるがごとくにみえども、しかし筆者にすれば、彼女がどんな〈わたし〉たるかをまだ確かめ切っていないことを語ると察するほかなくなる。そうなる彼女がヴェーユの登場でか気分にはさせられたは、自らの〈存在理由（意味）〉を定かにし得ないうえに、〈社会問題（他者）〉に対する無関心に気づかされずにいない、自らへの倍の焦りによる、輻湊した心境以外にないともかぎらないのだ（ヴェーユが自身の〈存在理由（意味）〉をどう捉えていたかは後述に譲る）。このいずれをも

彼女に解決できたは繰返すが、サルトルの彼女への支えなしに不可能であったと、だから彼女は彼と接してはじめて、自らの焦りをも解消させ得たとみてかまわぬのである。

しかし、〈わたしは世界全体に達して闘い得る勇気を羨んでいた〉と関連させてみる場合、ボーヴォワールの〈世界全体〉に立ち向かえ得ない焦りから、この〈envie(r) (羨望 (する))〉がもたらされるかといえ、筆者は否と答えるほかなかろう。〈世界全体〉とはもとより、〈社会問題 (他者)〉をさすのと同じである。彼女が〈社会問題 (他者)〉に無関心であれば、うわさ相手の〈cœur (勇氣)〉に対する羨望が生じるはほぼ確かといえようが、それでも彼女はヴェーユのようにありたいとまともに思っていたのであろうか。〈わたし以外〉に、要は〈社会問題 (他者)〉のことに関知しない立場を固持していたことは、彼女をして〈他者〉たるヴェーユの存在を、換言すると〈お腹をすかせた〉〈他者〉を認めさせることではないとみえるからして、羨望は虚偽か、口先きだけでいう表現かでしかないごとくに予想される。もしヴェーユに対し生まれくる、この〈羨ましい〉気持が本物であるならば、羨望はおそらくボーヴォワールの焦りをそのきわみまで達しさえずにおかないであろう。なぜなら当の彼女にあって、ヴェーユとの出会いが〈社会問題 (他者)〉にかかわられずにいた、自らの眼を見開かさせては、〈頑なさ〉に依拠し〈存在理由 (意味)〉を探るだけにとどまらせはしない焦りさえ生み出させたともかぎらないからである。

ボーヴォワールがこうした焦りを、21歳に高等師範学校の哲学科でサルトルを知るときまで持ち越すは、自らの人生選択に関しまじめに悩み迷っていたといえるからである。むろん悩み迷いは彼女だけでなく、青春期の人の一現象にあれど、彼女は人一倍の悩みや迷いを抱えていたようにみえる。進路選択の一例として、彼女は20歳頃に、哲学の大学教授資格試験の受験準備を始めたときながらも、18歳頃では〈歴史⁽⁸⁾〉や〈哲学よりも文学を好んでいた⁽⁹⁾〉ということが取り上げられよう。いずれの選択も自らの努力なしに研鑽不可能になるにせよ、彼女が6歳頃から〈数年の間、わたしは両親の言いなりに従った⁽¹⁰⁾〉と記すもおよそ一般にいわれることであろうが、この〈両親の言いなりに従うこと〉から、また学士論文の主題に関し、例のブランシュヴィックの言いなり

の指導を受ける⁽¹¹⁾ことから、筆者はサルトルのことを想起するまでもなく、彼女には意外に、いや多分に、誰かがそばに付いていないと動けないような一面があるとの印象を拭い去れない。だが他面で、彼女が哲学の大学教授資格試験に挑戦したことは、ヴェーユに対抗すべくか、サルトルに接すべくかのいずれに刺激されたか、また他のことか分からねど、取得した以上、彼女に負けず嫌いで不屈な精神（意志）が読み取れよう。

とまれ、ボーヴォワールがこの資格を可能にし、それでいてのちに実存主義的文学者（作家）として身を立てたのは、知識人と呼ばれるためか、何より当時の世間的常識を脱して〈自分の階級（層）から解放され〉たことを実現させるためかだが、自らを人一倍悩み迷わせた日々を乗り越え、そこまで言うのけさせる、精神的動機が『娘時代』に窺われるならば、それは何かを私見にしてもみておかねばならない。何かはまた、前記に従えば、彼女が何ゆえ自らの〈存在理由（意味）〉の発見を優先させていたかに、あるいはこれを彼女の〈頑なさ〉によるとした以外のことでは、何が〈頑なさ〉を彼女にもたらしたかに答えを出すのと同じ疑問なのである。そこでこの何かをば、筆者はまず、これもすでに触れおいたごとく、サルトルに出会う以前の、彼女を取り巻く環境にあったとみるところからはじめる。

ボーヴォワールが学校に通う6歳頃、〈不幸を想像することは不可能であった⁽¹²⁾〉というほどに、すべてに亘り順調で恵まれた暮しを〈数年の間〉送ることになったと述懐するが、しかし10歳頃、父は職探しで苦勞していたとされるから、彼女はこの事情にて依然として〈両親の言いなりに従〉うほかなかつたはずである。だが〈社会問題に対して無感覚だった〉という14歳には、一家は〈（それなりの生活の）安定〉を取り戻すようにみえるがゆえに、彼女自身に〈心地よい夢〉に浸る余裕が生じ、それでもしや〈文学〉への興味や意欲に掻き立てられることに繋がらせるのではなかったかとも予想させ得よう。

ところが同じ14歳か15歳の頃、それまで、父権的権威をかざす一方、〈懐疑主義（scepticisme）〉⁽¹³⁾者で、およそ信仰心のない父から、学業を手助けしてもらっていたことはともかくも、熱心なカトリック信者である母から、この道徳教育を受けて、つまり〈わたしは神の現存によって存在すると感じていた〉⁽¹⁴⁾と語

るごとくに育てられていたボーヴォワールは突如、その信仰を失ったと告白する。こうした、14歳時の引用文と15歳時の二引用文とは以下の通りである。

《Je ne crois plus en Dieu.》... Si j'avais cru en lui, je n'aurais pas consenti de gaieté de cœur à l'offenser. J'avais toujours pensé qu'au prix de l'éternité ce monde comptait pour rien, il comptait, puisque je l'aimais, et c'était Dieu soudain qui ne faisait pas le poids: il fallait que son nom ne recouvrît plus qu'un mirage.⁽¹⁵⁾

「わたしはもう神を信じない。」... もし神を信じていたならば、わたしは神に背くことに自ら進んで同意しなかったであろう。わたしはいつも、この世界は永遠と比べてみるに価値がないと判断していた。だがこの世界こそ重要なのだ。なぜならわたしはこの世界を愛していた（ことに気づかさず）、それで突然神は重要でなくなったからである。神の名は幻影を包むしかなかった。（括弧内は筆者）

Elle (la littérature) m'assurerait une immortalité qui compenserait l'éternité perdue; il n'y avait plus de Dieu pour m'aimer.⁽¹⁶⁾

文学はわたしに失われた永遠を埋合わせることによって不死を確保してくれたであろう。わたしを愛するために、もはや神は存在してはいなかった。

Je m'abîmai dans la lecture comme autrefois dans la prière. La littérature prit dans mon existence la place qu'y avait occupée la religion.⁽¹⁷⁾

昔、祈りに身を沈ませたように、わたしは読書に没頭した。わたしの生き方のなかで、文学が信仰の占めていた位置に取って代わった。

三引用文を読めば、ボーヴォワールが精神的支えを、要は筆者のいう「生きる姿勢」を「悩みや迷い」を抱えたなかから、何に見出さんとしたかを明らか

にできよう。その「悩みや迷い」の兆が大黒柱たる父の何度かの転職で一家に不安を巻き起こさずにいなかった、彼女の10歳頃にはじまるとみてかまわぬは、このとき彼女が〈神をこの世界の外に追放した〉⁽¹⁸⁾ や〈わたしはいつも幻影よりか現実の方が豊かであると思っていた〉⁽¹⁹⁾ と記すことに窺えるからだし、「悩みや迷い」の断ち切りがサルトルに会う21歳以降のときであったと繰返しいえるならば、彼女の10歳代は総じてこの精神的「悩みや迷い」に付き纏わされたからであろうといい得る。たとえば18歳に、〈わたしは本心から生きているよりも死んだ方がましだと考えていた〉⁽²⁰⁾ と書くこともその「悩みや迷い」を証しするにちがいない。

父から引き起こされた、一家の不安がボーヴォワールの精神的「悩みや迷い」に影響したと指摘できるにしろ、それでも精神的「悩みや迷い」は物質を供与される、その多少によって生じたのではない。6歳頃の彼女に〈不幸を想像することは不可能であった〉と語らせた例は、彼女が物質的豊かさに恵まれ、何不自由なく暮らせたことを証す言でしかなく、この言での〈不幸〉とはそうした物質を享受し得ない謂の語にすぎなからう。それでは、たとえ10歳頃に、彼女もかの予期せぬ不安に実際襲われて、物質的欠乏を託つにしても、何ゆえ同時に前記諸引用文中の精神的「悩みや迷い」なしには表明できないようなことが記録されたのか。諸引用文は、「不安」に陥れる、いわば物質的〈不幸〉を起因に書かれていたのではなく、しかしその「不安」を契機にしては、なおさら「生きる姿勢」としての、彼女自らの精神に生じさせられた「悩みや迷い」を、すなわち精神的〈不幸〉を記し残さずにおれなかったことにあると断じおかねばならぬとともに、この精神的〈不幸〉からの脱出を図るべき方向が打ち明けられたことをあらわす以外にないと読む必要がある。「生きる姿勢」たる方向はいうまでもなく、〈社会問題（他者）〉や〈信仰〉の問題ではなしに、彼女の〈存在理由（意味）〉の発見にあった。〈わたしの発展〉⁽²¹⁾ のために、自らの〈存在理由（意味）〉を見出すことに対してだけ、精神を持し、鍛えるうえでは〈頑なさ〉が固守されるほかなくなっていたのだ。

しからは精神的「悩みや迷い」すなわち〈不幸〉でもがくボーヴォワールが上記したごとき方向を選ばざるを得なかったはなぜか。筆者はこの理由を、家

庭環境の急変によって、自我が目覚めさせられた10歳頃に求め得ると読むことができようが、しかしそのことよりか、もしかして彼女の目覚めの動機には、10歳以前から14歳か15歳はむろんのこと、17歳の大学入学前までの長期間従わされ続けてきた、〈この世界〉の生をば父の、さらにあの世界の生をば母の、厳しい各教育と躰にあったとみられるやも知れない。その通りなのだ。両親それぞれの、相反する極端な教育と躰で育てられては、彼女自身が「複雑な心境」に追い込まれるは疑いない。わけても10歳頃、そうした教育と躰のうえに、家庭環境の急変が重なると、彼女はおろか誰にでも、精神に均衡を欠かせ、何らかの「悩みや迷い」をもたらさずにいない。彼女にあっては精神的「悩みや迷い」ととどまらずして、要は〈自分の階級（層）からの解放〉をめざし、その〈既成の秩序に逆〉うかして、両親からの自立を決意させたのであり、自立するためには何より、14歳の〈神を信じない〉という告白が、また大学への進学が必要になっていたとみておかねばならない。進学はおそらく父が〈反フェミニスト〉として君臨した〈わたしの階層〉に対する抵抗であり、自立の証しの一になるが、しかし彼女が〈社会問題（他者）〉にかかわろうとしたうえでの自立にはなしに、あたかも〈男〉と同等になろう、自ら（の存在）を見出す自立に向かわせるにあったとみえる。

しかしながら、ポーヴォワールに神を信仰しないと宣言させたことが何ゆえ、その自立のもう一つの証しになるのか、とどのつまり信仰を失うことがどうして彼女自らの〈存在理由（意味）〉を探ることに関与するかである。筆者が察するに、これは彼女の生き方や思想の矛盾を回避させるためである。なぜなら〈幻影〉にすぎないという、「あの世界」たる〈永遠〉の神が目に映り、彼女が神を〈この世界〉に実在するごとく感じたところで、彼女にとって、〈この世界〉での〈社会問題（他者）〉に対しては無感覚だったとみなされる以上、神が「あの世界」のことにかかわるといっても、〈この世界〉の「他者」と変わりなく捉えられていなければならぬのであり、神なる「他者」にのみ関心を寄せ、神を〈愛〉し続けることは矛盾でしかなくなるからである。それゆえ彼女は「あの世界（永遠）」の「他者」である神の信仰さえ放棄せざるを得なくなったとみるわけである。だが彼女の信仰は、幼児洗礼を母からいわば強制的に受け

させられてはしまった感があるにしても、14歳にいう〈突然神は重要でなくなった〉とは、それまで敬虔に熱心に神を〈愛〉してきたことが果たして真であったのかと疑問を投げかけさせずにおかなくなる。〈神を信じない〉というならば、神はもはや彼女の精神の支えでなかったことを暴露させるからして、この信仰に対する「悩みや迷い」は当初より見当たらないことになろう。それにもまして、いったんは信仰者であった彼女がゆえに、信仰を装うことは許されぬことである。そこには彼女の傲慢さが見え隠れする。

しかも最たる傲慢さは、ポーヴォワールが〈永遠〉の神なる「他者」に、かつ〈この世界〉の、おそらく家族を含めた「他者」に無関心になることよりか、自分なしに〈この世界〉は存在しないと断じるところにある。筆者が彼女は「自分以外のことに考えが及ばない」と書いたことを証す引用文すなわち〈わたしは自分によって、自分のためにだけ存在している〉⁽²²⁾はむろん、彼女自らの〈存在〉が「他者」とかかわりなくみる〈この世界〉にあって語られることである。だから〈わたしを愛するために〉は、また自分を活(生)かすには〈この世界〉が存在していなければならず、〈わたしはこの世界を愛〉することが課せられ、〈この世界こそ重要なのだ〉と叫ばずにおれなかったのだ。自分のための〈この世界〉だけが必要であったわけである。これは自分がまさに〈この世界〉に等しく〈存在〉するという思想になり、繰返すが、そこでは自然や「他者」も存在せず、〈わたし〉の〈存在〉を欠いては成り立ち得ないことを踏まえさせた生き方が求められてくる。彼女の〈突然〉の変わり様は、いまだ「どんな〈わたし〉たるか」を知らされぬども、これに気づかされたからにちがいない、つまり彼女は自らの〈存在〉もしくは〈存在理由(意味)〉をみつけることなく、その「悩みや迷い」を乗り切れないでいるし、大学進学を果たすかしても、自立半ばであったように察知される。

再度いうが、〈この世界〉はポーヴォワールにとって、自分のための世界になるだけか、自分が世界であるとみてよいことを意味させた。だから彼女に、〈わたしを愛するために〉〈この世界を愛していた〉といわせて過言でないどころか、〈この世界〉を〈わたしは自分によって、自分のためにだけ存在している〉ような世界にすると語らせなければならなかったわけである。こうして、〈わたし〉

と〈この世界〉が一になるには、「悩み」「迷」う〈わたし〉がサルトルにいう、周知の〈自らを選択する〉や〈自らを投企する〉ことに倣う、要は彼女にあって、〈他の人たちの生きる手助けとなる作品〉に向けて、自分を高め、自分を豊かにし、自分を表現すること⁽²³⁾が試みられよう。引用文中の〈作品〉とは当然、彼女が15歳のときに記した〈文学〉に関する〈作品〉であり、小説をものすることを示唆させる。その際〈作品〉を修飾しよう語句に注意すべきである。〈作品(小説)〉は彼女が〈他の人たちの生きる手助けとなる〉ために書かれたのではないからだ。〈作品(小説)〉は上記に関連させると、〈他の人たち〉の〈この世界(社会)〉のことをでなしに、あくまで〈自分〉という〈この世界〉を描くにあり、〈この世界〉たる〈自分を高め、自分を豊かにし、自分を表現すること〉を取り持つ仲立ちでしかない。

〈わたし〉が〈文学(作品)〉に精力を注ぐことは、〈文学(作品)〉をして〈わたし〉の分身たらしめるがゆえに、もとより〈わたし〉の生きる〈この世界〉を表現させることでなくてはならない。ここからも〈この世界こそ重要なのだ〉となる。〈文学(作品)〉はだから、〈この世界〉たる〈わたし〉そのものでしかなくなる。〈文学(作品)〉が〈この世界〉たる〈わたし〉を活かすことでなければ、〈他の人たち(他者)〉としての〈この世界〉に無関心であるとした、彼女の言が語られるはずがなかろうし、また是見よがしに、彼女が〈他の人たちの生きる手助けとなる作品〉をころごすと断じるならば、それは彼女のねらいと矛盾し、傲慢にすら聞こえてくるにちがいなかろう。そうではなしに、〈わたし〉の〈この世界〉を〈作品〉にして伝えないかぎり、〈作品〉は〈他の人たちの生きる手助けとな〉らない謂なのだ読み取らねばなるまい。この見方にも彼女の、多少の傲慢さが残るが、それでもこの見方において、筆者は〈わたしの取るべき道ははっきりと示された〉⁽²⁴⁾ことを知る。

だが18歳のボーヴォワールは一方で〈哲学よりも文学を好んでいた〉と記しつつも、将来の〈文学〉者、小説家として「どんな〈わたし〉」を描くか明らかにはしていないし、他方で哲学教師になろうとの希望や未練も捨て切れずにいるからして、〈わたしの取るべき道〉が方向づけられたにもかかわらず、いまだ〈わたし〉に関する、こうした「悩みや迷い」はつきることがなく、果ては〈死

んだ方がましだ」とされる気持（精神）のまま、19歳か20歳を迎えるまで引き摺られ、筆者が最初に掲げた、ヴェーユとの出会いの、長い引用文に繋がりがゆくといいわけである。むろんボーヴォワールが「悩み」「迷い」はじめた10歳頃には例の、〈わたしは神を世界の外に追放した〉や〈幻影よりか現実の方が豊かである〉と述べていただけでなく、ここからさらに、〈幻影（永遠）〉に〈取って代わるに〈文学〉を選んだことになると、〈文学〉は〈この世界（現実）〉を〈幻影〉にさせることなしに、そうした〈わたし〉を表現する媒体にほかならないことを証明している。〈文学〉が〈この世界〉で成るは〈現実の方が豊かである〉からである。かつ〈現実の方が豊かである〉は「あの世界（神）」に關することが〈幻影〉であるに比して、〈幻影〉ではない〈この世界（現実）〉がすべて〈自分を豊かに〉し得る素材（対象）になると彼女に認められるからである。したがって〈文学〉もまた彼女にあつて、もはや〈幻影〉に、〈夢想〉にとどまらなければならないことを意味させる。

以上によって明示されたは、筆者のみるところ、ボーヴォワールが10歳から21歳にサルトルに出会うまでの、かなりな期間、「どんな〈わたし〉」として生きるか、精神的に「悩み」「迷い」続けていたことであり、この「悩みや迷い」ゆえの、筆者にいう精神的〈不幸〉を除いて、10歳代の彼女を語ることができなくなるということである。だから彼女の10歳までを一言で、〈わたしは幸福を知っていた〉といえるにせよ、その引用に続く文章〈わたしは幸福をたえず欲していた〉とは10歳以降の言に相当し、しかもこの〈幸福〉は物質的〈幸福〉をよりか、精神的〈幸福〉をめがけることを示唆させる。この〈幸福〉こそ彼女にとって、「どんな〈わたし〉」として生きるかとした、〈わたし〉の〈存在〉を確立し、その〈存在理由（意味）〉を確認することにほかならなくなる。

しかし筆者はここに、さらなる問題が生じていると察知する。すなわち〈幸福〉はまさに今「悩み」「迷」っている〈わたし〉に当てはまるのではなく、〈わたし〉がこの精神的〈不幸〉を取り去ったうえでもたらされるということである。そこでボーヴォワールにも、〈わたし〉を〈幸福〉にする術を見出さねばならぬことが問われたわけである。彼女にあつて、〈わたし〉のいまだあらぬ〈存在〉を求めることは、もしくはこの〈存在理由（意味）〉を問うことは、サ

ルトルも指摘するように、〈わたし〉が自らの精神（意識）に〈作為する（faire）〉働きかけを命じることでしか成り立たないはずである。〈作為する〉とは筆者にいわせると、〈思惟する〉こと、その〈思惟（観念）〉を生み出すことであり、彼女の精神（意識）にかぎらない、誰もが持ち合わせよう理性（知性）からもたらされる能力なのである。

20歳頃のボーヴォワールは理性に関し、次のごとく記す。すなわち〈わたし〉はある種の体験が理性の限界を越えて、絶対をわたしに示し得まいと自問した⁽²⁵⁾と。この引用をして、〈理性〉では〈絶対（神）〉が捉えられないことを、また〈理性〉に代わる、いかなる能力も指示しないことを示唆させるは、彼女に〈信仰を失〉わせた一理由になろう。要するに彼女は宗教〈体験〉にとって、〈理性〉が役立たないことを、換言すると〈理性〉は〈この世界（現実）〉においてこそ、大いに活用されるべきことを強調させたかったのである。〈理性〉を駆使して、〈この世界（現実）〉における、〈わたし〉の現〈存在〉を〈作為し〉なければ、このいまだあらぬ〈存在〉になり得ぬであろうというわけである。

ボーヴォワールが〈わたし〉の〈存在〉の確立や〈存在理由（意味）〉の発見によって〈幸福〉になるために、〈理性〉を行使し浮かび上がった〈思惟（観念）〉はしかし、理想を掲げる中身でしかなかった。すでに一見した通り、サルトルとの出会い以後の彼女の思想は彼の思想に代えて論じるにしても、それまでの彼女は、いわゆる「現実（この世界）と理想」を〈思惟する〉にあって、〈わたし〉以外の〈現実〉を知ろうとしないし、およそ〈社会問題（他者）〉に対しては無感覚だったというかして知るだけだから、少なからず自らの〈思惟（観念）〉すなわち理想を〈わたし〉以外の〈現実〉側に立たせて生み出したのではない。つまり彼女は〈わたし〉以外の〈現実（他者を含めたすべて）〉をそのまま〈思惟（観念）〉にして理解したのではなく、今ある〈わたし〉だけの〈現実（存在）〉を理想に依拠させた〈思惟（観念）〉でもって変えようとしていたのだ。彼女の場合も、〈思惟（観念）〉がなぜ自らにかかわり、その理想にとどまるかといえは、当然、〈思惟（観念）〉たるや自らによって生み出されるだけであるし、自らに可能な〈現実（存在）〉に作り変えられる、唯一の能力になるからである。彼女はそれまでの精神的〈不幸〉の〈現実〉を精神的〈幸福〉

の〈現実〉に向かわせるも、自らが〈作為（思惟）する〉ことからの〈思惟（観念）〉すなわち理想を見出すほかなかったのである。

だからかヴェーユがボーヴォワールを、〈観念論的小市民階級〉者とみなしたは納得できよう。大学に通えることから〈小市民階級 (bourgeois)〉と語ってよいかどうかはともかくも、〈観念論的〉なる修飾語は繰返すが、ボーヴォワールが精神的〈幸福〉を獲得せんとして、理性による〈作為（思惟）する〉よりもたらされる〈思惟（観念）〉で、自らの今ある〈不幸〉を払拭させる理想をめざす謂でしかなくなる。そして物質的なもので〈お腹をすかせたことがない〉ごとくみえるボーヴォワールは上記した〈幸福〉すなわち自らの観念（理想）を、18歳当時のそれこそ〈幸福〉として〈文学〉に表現してみる以外になかったと察知し得るのである。

このボーヴォワールと好対照の生き方をなすとみえるのがヴェーユであった。たとえばヴェーユには、同じ21歳頃の、ボーヴォワールに、〈サルトルはわたしと知り合いになりたがっていた。彼はいつか会いたいといってきた〉⁽²⁶⁾と語らせ、彼が精神的支えとなり、たえずそばにいてくれては〈幸福〉を感じ取れるような誰も現われなかったし、誰からもこうした誘いを受けることなく、ひたすら学士論文の仕上げに取りかかっていた。この学生時代から、いやそれ以前から終生、ヴェーユは独立独歩で孤高の人であった。それは精神的支えを〈超越的な王国〉に求めはじめていた、14歳に溯らせる、以下の引用文で証明されるにちがいない。

A quatorze ans je suis tombée dans un de ces désespoirs sans fond de l'adolescence, et j'ai sérieusement pensé à mourir, à cause de la médiocrité de mes facultés naturelles. Les dons extraordinaires de mon frère, qui a eu une enfance et une jeunesse comparables à celles de Pascal, me forçaient à en avoir conscience. Je ne regrettais pas les succès extérieurs, mais de ne pouvoir espérer aucun accès à ce royaume transcendant où les hommes authentiquement grands sont seuls à entrer et où habite la vérité. J'aimais mieux mourir que de vivre sans elle. Après des mois de ténèbres intérieures j'ai eu soudain et pour toujours la certitude que n'importe quel

être humain, même si ces facultés naturelles sont presque nulls, pénètre dans ce royaume de la vérité réservée au génie, si seulement il désire la vérité et fait perpétuellement un effort d'attention pour l'atteindre. Il devient ainsi lui aussi un génie, même si faute de talent ce génie ne peut pas être visible à l'extérieur. Plus tard, quand les maux de tête ont fait peser sur le peu de facultés que je possède une paralysie que très vite j'ai supposée probablement définitive, cette même certitude m'a fait persévérer pendant dix ans dans des efforts d'attention que ne soutenait presque aucun espoir de résultats.

Sous le nom de vérité j'englobais aussi la beauté, la vertu et toute espèce de bien, de sorte qu'il s'agissait pour moi d'une conception du rapport entre la grâce et le désir. La certitude que j'avais reçue, c'était que quand on désire du pain on ne reçoit pas des pierres. Mais en ce temps je n'avais pas lu l'Évangile.

Autant j'étais certaine que le désir possède par lui-même une efficacité dans ce domaine du bien spirituel sous toutes ses formes, autant je croyais pouvoir l'être aussi qu'il n'est efficace dans aucun autre domaine. ⁽²⁷⁾

14歳のとき、わたしは青春期の底知れぬ絶望の一つに陥り、生得的諸能力の凡庸さのために、本気で死ぬことを考えた。そう意識させたのは、パスカルと比較し得る幼年時代と青春時代を過ごした兄の並外れた才能であった。わたしはうわべの成功の得られないことを嘆くのではなく、真に偉大な人間たちだけが入る、真理が住まう超越的な王国への、いかなる接近も期待し得ないことを嘆いていた。真理なしに生きるよりか、死ぬ方がよかったのだ。内的暗夜の何か月かを経たあと、わたしは突然、しかも永遠に、人間がおおよそいかなる生得的諸能力をもつにあっても、ただ真理を望んだり、たえず真理に達するための、注意力の努力をなしたりするならば、いかなる人間でも天才に与えられている、真理の王国に入り込めることを確信した。こうしてその彼（人間）もまた天才になる、たとえこの天才には才能が足りないせいで、外から見て取れ得ずともだ。のちに頭痛がわたしのわずかな能力を麻痺させ、すぐにこの麻痺が決定的なものたり得ると思われたとき（から）、（数

えて) 10年間、わたしはその同じ確信によって、結果がほとんど期待されなかったにもかかわらず、この注意力の努力をねばり強く続けることができた。

真理という名前に、わたしは美、徳(力)とあらゆる種類の善をも含めていたので、それはわたしにとって、恩寵と願望との間に関係がみられると考えられることであった。わたしが受け入れた確信は、(マタイ福音書によるように) 人がパンを望んで石を与えられはしないということであった。だがわたしはその頃、福音書を読んでいなかった。

わたしは、願望がそれ自身によって、あらゆる形相状の、霊的な善の領域で効力を有することを確信していたと同程度に、他の領域では効力のないことも確信できると信じていた。(括弧内は筆者)

上記引用文はヴェーユが1942年フランスを離れんとする前後に、ペラン神父に宛てた手紙の一つで、これを「霊的自叙伝」と呼んでいた、その一部である。彼女が自らの生涯をほぼ完結させるに近づきつつある時期に書かれた一部は、筆者がここでボーヴォワールとの相違点を見出すに足るだけでなく、これまでヴェーユについて語りながらも、まだ明確に答え得なかった諸点を証すのに適当する引用文である。

まずは二人のシモーヌの当時の異なる主張をまとめてみる。二人はいずれも早生まれだからして、1歳年上の、14歳や15歳時のボーヴォワールに〈神を信じない〉〈神は存在しない〉と、ヴェーユに14歳を振り返えさせて〈真理の王国に入り込める〉といわせるは、およそ同じ時期での主張になるといえるほか、その主張も繰返すが、相反するとき異なりをみせてくる。つまり各自が同年齢頃に記したことは、ボーヴォワールにすれば、筆者の察するに、家庭のあの事情が長女として、その現実を、彼女の言では〈この世界を愛〉するほかないことを、たとえば一家を確り支える気持を持たずにおれないことを迫まされたためか、〈突然〉「あの世界」の〈神は重要でなくなった〉、要は信仰どころでなくなった、いわばその転機に立たされた主張であるのに比べ、天才たる兄を持つヴェーユにすれば、兄の到達した〈真理〉に近づく〈努力〉に欠けること

が自覚された主張になろうとの相違を浮かび上がらせる。

だがボーヴォワールの場合、かの「一家を確り支える気持」をして家族への愛や思いを抱かせしめるにしても、家族への愛や思いは彼女の主張の本をかたちづくってはいないと断じおかねばなるまい。家族への愛や思いが彼女の主張の本を占めるとされるならば、彼女は母から授かった信仰を失わないはずであろうし、およそ〈社会問題に対しては無感覚だった〉とは語らないにちがいない。キリスト教者としての信仰も、また家族も個人のことにとどまらず、〈社会問題〉に、〈この世界〉のことにかかわりをみせて捉えられるのだから、たとえば家族を〈この世界〉と切り離すことは矛盾を生じさせる。要するに、彼女が信仰を失ったとした14歳やそれ以前に、〈わたしは既成の秩序に逆らいはしなかった〉や〈わたしは両親の言いなりに従った〉と記すことでの、筆者の指摘していた「世界の間へへの関係」にあつて、「世界」が家族（社会問題）をさし、例の父の失職が〈人間（彼女）〉に受容される「関係」を新たに作るうへは、〈社会問題（家族）〉に〈無感覚だった〉という〈彼女（わたし）〉にとって、この「関係」は矛盾を意味させるほかなくなる。だから家族への愛や思いは、彼女が家族に〈無感覚（無関心）〉のままであれば、矛盾をはらんだ、その愛や思いになろうし、この「関係」にみられる「世界（家族）」を本にして生まれるのではなからうといえる。

それでは何を本に、ボーヴォワールの家族への愛や思いは生じたのか。〈社会問題に対しては無感覚だった〉ことは〈わたしは自分によって、自分のためにだけ存在している〉〈わたしを愛する〉がゆえであった。これこそ彼女の主張の本なのである。さらに彼女に〈わたしはこの世界を愛していた〉といわせる〈この世界〉も、筆者にはむろん「あの世界」や、〈社会問題〉を抱える〈この世界〉のことを示すのではなく、〈わたし〉だけを中心に回る〈この世界〉であったと読まずにおれなくなる。そしてここから、すでに触れた通り、彼女は精神的〈不幸（悩みや迷い）〉を振りほどくほどの、自らの〈世界〉での〈存在理由（意味）〉をみつけ出そうとし、自らの自立をば可能にさせようとするのだ。それは、これも筆者の繰返しになるが、彼女にとって〈社会問題〉が忌避される以上、ここにはもはや「人間（彼女）の（身近かにある）世界（家族）への

関係」を問わせるしか、彼女（わたし）がその「関係」を保つうえでの、家族への愛や思いを寄せるしか残ってはいなかったと推察されるからである。そこに立つ「愛や思い」は、それ自体情的であるせいか、両親による、厳しい躰に知的反発をみせるよりか、むしろこの躰や（既成の秩序）を素直に受容させんとするとき、また知的に自立しよう試みを通して、確りとした自分をあらわすことが両親に精神的なる信頼と安心を与えられるとき、家族への愛や思いであったと推量される。だからかたとえば、ヴェーユがしたように、〈社会問題〉を質す、かの《ユマニテ》紙を読むのでも、ひどく煙草をのむわけでもなかった。一言でいうと、彼女から知り得る「愛や思い」は、彼女がヴェーユに〈小市民階級の人間に分類〉されたときも、この当ても依然、良家の子女としての礼節を守ることにはよかならなかったのである。

またボーヴォワールはヴェーユを〈世界全体に達して闘い得る勇氣〉ある人と表現した。これは当然、〈社会問題（自分以外のこの世界）に対しては無感覚だった〉ボーヴォワールに比べ、ヴェーユは学生時代も含め生涯、〈社会問題（この世界）〉に関心を深めていたことが分かる。以上はいわば、「人間の世界（自分の世界）への関係」を、「世界（自分以外の世界）の人間への関係」を主張するのがそれぞれ、ボーヴォワールであり、ヴェーユであったことを明かさずにいない。だからヴェーユにあっては、ボーヴォワールにいわせる〈世界全体に達して闘い得る勇氣〉が、あたかも「世界が全体幸福にならないうち、一人の幸福はあり得ない」⁽²⁸⁾と叫んだ、宮澤賢治の精神（魂）に通じるように捉えられる。つまり彼の精神（魂）も、ヴェーユにいう、物心両面で〈お腹をすかせた〉〈あらゆる人間に食物を与え得る革命こそ、今日地上（この世界）で唯一大事なことである〉ところに成り立つのであり、彼が芸術革命とも強調しては、これも物心両面で〈お腹をすかせた〉農民たち（農村社会たる世界）を救わんとしていたことは周知の通りである。

ヴェーユと宮澤賢治が「世界の人間への関係」に基づく「生きる姿勢」をもって〈この世界〉に接していたことはしかし、その〈人間たち（世界）の幸福を作り出すのではなく、人間たち（世界わけても自分の世界）の存在に意味を見出すことにある〉と断じたボーヴォワールには否定される。二人のシモーヌの

生き方がこのように対極にあるとみえるは各人の気質のみによるか判断しかねども、ヴェーユが〈あなたは一度もお腹をすかせたことがないのが分かるわ〉といて、ポーヴォワールの〈存在理由（意味）〉の発見なる生き方を一蹴したことで明かされる。おそらく〈食物〉では〈お腹をすかせたことがな〉かるポーヴォワールにとって、物質的〈不幸〉に見舞われることはないといえるが、それでも二人が出会った当時、彼女が精神的〈不幸〉を引き摺っていたとみるは確かである。そこでいわば〈お腹をすかせた〉精神的〈不幸〉を脱しようとして、彼女は再度いうが、自分の〈存在理由（意味）〉をみつけ出すことが〈幸福をたえず欲していた〉自らにあって、その〈幸福〉を引き寄せることになるにせよ、そもそも〈存在理由（意味）〉を発見させるべく、そこに精神的〈不幸〉がなくば、自らの自立すなわち〈幸福〉はめざせないし、これを語るのがいわゆる《実存主義》思想（哲学）であるにちがいないと読み得る。

ポーヴォワールがヴェーユに〈une petite bourgeoise spiritualiste（観念論的小市民階級）〉の人とみなされた、この語句のうち、〈spiritualiste〉の語の方は〈唯心論的〉や〈観念論的〉のいずれの訳も可能であろうが、ここに〈観念論的〉と記すはポーヴォワールがサルトルに出会い、実存主義に与する前まで、彼女の求める〈存在理由（意味）〉が理想（主義）的に終始するとみえるからして、筆者をして不断これに見合う〈観念論的〉なる訳語を用意させたわけである。自分の〈存在に意味を見出す〉とした〈存在〉はおよそサルトルにいう〈本質に先き立つ〉〈存在（実存）〉になるにせよ、そのためにも彼と出会った彼女にとって、〈わたし〉以外の〈この世界（他者）〉の〈存在〉や〈フェミニスト（女性）〉としての〈存在〉にめざめることが欠かせなくなった。各〈存在〉に対する思想はだから、彼女が実存主義に身を置いてから導出されたといえる。するとその実存主義思想とは何かを、たとえばこれも〈観念論（理想主義）〉で成り立つ哲学か否かを見定めなければならぬが、すでに触れおいたごとく、彼女のかかる思想さえ、サルトルの思想（哲学）に代表させて論じる次号以降で明確にすると断わりおく。

だがそうであっても、ポーヴォワールがサルトルに出会う以前の、自らの〈存在〉に対する思想は何ゆえ〈観念論（理想主義）的〉であるとみたのか。それ

は、彼女が自分以外の〈この世界（現実）〉を無視しては、自分のきたるべき世界（現実）を追い求めるほかなくなったからである。しかも彼女に強調されていた〈理性（知性）〉で、今の自分ではない、何ものかたる〈存在〉を明かす必要に迫られていたのだから、筆者にいう「静の行動」の能力よりもたらされよう〈思惟〉が、自分以外の〈この世界（現実）〉と疾うに遮断し、そのうえ「悩みや迷い」を抱えた精神（頭脳）にあっては、今の自分を振り返らせるよりか、あるべき自分の〈存在〉を〈思惟〉の対象にさせて組み立てられるほかなく、まさに自分の精神（頭脳）だけを中心にした、その〈思惟〉は〈観念論（理想主義）的〉であるとしかいいようがなくなるのである。

ヴェーユと会話を交わした当時、ポーヴォワールが〈人間たちの存在に意味を見出すことにある〉と語るからには、ポーヴォワールは自身に向けられた、現在（現実）と相違する〈存在〉を模索していたにちがいないし、その模索はすでに〈観念論（理想主義）的〉でしかないということだ。こうした作用を司る能力は誰もが有する〈理性（知性）〉であって、これは過去現在未来の、〈わたし〉にばかりか、〈世界（が）全体〉に対して〈思惟する〉ことを可能にさせ、その一を分析したり整合したりするのに適合した〈思惟する〉であり、〈思惟〉であった。しかるに彼女の〈理性（知性）〉が行使されるは今の自分ではない〈存在〉をめざすことにあつたのだから、その理想（主義）的〈思惟（観念）〉は現在に発する〈観念（理想）〉をいつか現実にさせるときだけを〈わたし〉の〈この世界（現実）〉にする。さすれば彼女の（実存主義）思想にとって、この〈観念（理想）〉ときたるべき現実とのへだたりは埋められるのか、さらに〈思惟する〉今という現実が彼女を〈存在〉させているのか、そしてこれらに解答なくば、それこそ〈理性（知性）〉に依拠しよう限界になりはしないかという疑問が筆者に沸いてくる。ただ何にせよ、当時の彼女はあるべき現実すなわち〈幸福〉を〈思惟（観念）〉に求め、〈幸福〉を実現するに〈文学〉を選んでしたが、しかし〈観念（理想）〉を生み出す、彼女の〈理性（知性）〉で知るべきは、それが「あの世界」にどころか、〈無感覚だった〉〈この世界〉に対しても役立つ能力ではあり得なかつたし、〈理性（知性）〉は自分や自分以外の〈この世界〉のことをそのまま受け取り得る能力ですらなかつたことにある。

一方、ヴェーユは彼女の引用文冒頭に記される〈14歳のとき〉から、ポーヴォワールとの出会いまでにあつて、どのように生きようとしていたとみることができるか。ヴェーユの引用文を読むかぎり、筆者に気づきさせるは、彼女がサルトルをはじめとした実存主義者たちの思想の一面を共有しはしないかとされる点である。それは彼らが挙つて、実存するにはその契機を欠かせてならないということにあり、たとえばキェルケゴールに語られる絶望の思想と異なるやも知れねど、彼女も〈絶望〉の語を持ち出すからである。そこで筆者はこの〈絶望〉が実存の契機に合致するか否かを確かめておかねばなるまい。実存の契機は察するに、ポーヴォワールでは〈自分のためにだけ存在している〉との〈幸福〉の〈存在〉の発見に向けて、いまだこれをかえられない「悩みや迷い」にあることをきっかけに、ヴェーユでは自分の〈諸能力の凡庸さ〉から〈真理が住まう超越的な王国〉に入れない自分（の存在）を〈絶望〉していることをきっかけに、おのおのをして「悩み」「迷い」〈絶望〉した各〈存在〉を乗り越えさせること、すなわち本当の〈存在〉へと自覚せしめることにあるようだ。それゆえヴェーユにいう〈絶望〉も実存の契機になろうとはひとまずいえる。だからか二人はそれぞれ、〈幸福〉になれない「悩みや迷い」を払拭し切れなくては〈死んだ方がましだ〉と同様に、自分の〈諸能力の凡庸さ〉を知っては〈本気で死ぬことを考えた〉といったのだ。

だが同時に、ヴェーユをば〈死ぬこと〉にまで追いつめた動機は、実存主義者たちの一人ハイデッガーがいわゆる《本来的（本当の）存在》への自覚を喚起させた例に倣つても、結局実存の契機をして、ポーヴォワールの的にいえば、自分の〈存在〉にしかかかわらせないことと相違して、〈あらゆる種類の善〉の〈存在〉する〈真理の王国〉に参入できないことにあつたのだから、ヴェーユがいわば自分以外の〈存在〉たる〈真理の王国〉への参入をめがけることは、筆者にとってどうしても、実存主義にいう、この主張に似通うとは受け取れなくなる。繰返すが、彼女は〈絶望〉によって、自分を〈本来的存在〉に作り上げようとしたのではなく、自分以外の存在（真理）を掴もうとしていたのだ。

かりにヴェーユが〈真理〉を獲得できたとなると、獲得は自分に跳ね返り、ポーヴォワールのめざすような、自分の〈存在〉の確立に向け、いつか実現さ

れることを示唆させるからして、人は自分の〈存在〉に究極かかわらずにおれないと反論するであろう。だが否である。そこで筆者はこれまで述べてきたボーヴォワールの思想と比較させながら、否としたことに答えなくてはなるまい。

一に、ヴェーユの場合、彼女はボーヴォワールのように、あり得べき、自分の〈存在〉もしくは〈存在理由（意味）〉に固執しはしなかったことが窺える。それは筆者にいう「世界の人間への関係」での「世界（この世界）」が「人間（ヴェーユ）」に問われるごとく「関係」していたとみえるからである。ボーヴォワールでは〈この世界〉に〈無感覚（無関心）〉であったためか、自分（の存在）をいかにすべきかしか質されず、この「世界の人間への関係」は成立しなくなる。だから筆者にみる、ボーヴォワールの実存の契機たる「悩みや迷い」は自分だけに生じる「悩みや迷い」であるほかない。一方ヴェーユにいう〈絶望〉はどうか。〈絶望〉はもとより、〈この世界〉を〈他者〉とも換言した〈他者〉すなわち自分以外の、〈兄〉アンドレ（の存在）からもたらされた。〈兄の並外れた才能〉はすでに〈真理の王国（超越的な王国）に入り込〉ませていたといえるのだから、彼女は筆者に控え目にしか聞こえない表現〈諸能力の凡庸さ〉も加わってというのか、いまだ〈真理の王国〉に接近すらできない、今の自分を〈嘆いていた〉し、今の自分に〈絶望〉する以外になかったわけである。

一に、ヴェーユはだからといって、今の自分をボーヴォワールのように、あり得べき自分（の存在）に変えることを求めてはいなかったと繰返しおく。〈絶望〉のままに、〈内的暗夜の何か月かを経て〉得たことは、彼女に〈真理を望〉むかぎり、その〈王国に入り込〉めるといって〈確信〉を与えたとされる。〈絶望〉は筆者の察するに、「世界（兄）」と遮断された彼女（自分）にではなしに、「世界」といわば一体となった自分が〈感じ〉られる能力すなわち筆者が後記もして主張する〈感受性〉から生じることである。筆者によると、彼女の引用文に書かれる〈願望（*désir*）〉も〈絶望〉と同様、〈感受性〉を経由した〈感情〉であって、〈理性（知性）〉で獲得されるのではない。〈絶望〉はだから、〈理性（知性）〉を筆頭にする〈諸能力の凡庸さ〉のままでも、要は彼女に〈才能が足り〉ずとも、彼女が「世界（兄）」と一つになる一心で、誰もが有する、何より

〈諸能力〉を代表しよう〈理性（知性）〉を駆使させ、疾うに触れた、〈他者〉たる先哲や同時代人の諸思想を博覧強記でもって知り尽くすことを彼女の〈感受性〉やその〈感情〉に従わせ担わせることにあったといえるし、この「生きる姿勢」は、たとえばボーヴォワールにみる、実存の契機たる「悩みや迷い」の感覚や感覚を経由した感情と切り離れたうで、あたかも〈理性（知性）〉のみで、今の自分ではない自分（の存在）をめがけるのとは違って来る。それに〈絶望（あるいは願望）〉はなるほど〈理性（知性）〉の行使でそれぞれに命名されはするが、各それ自体〈理性（知性）〉で生み出されるわけでもなかった。かつ彼女はボーヴォワールの〈理性（知性）〉が「悩みや迷い」に代えて、あり得べき、自分（の存在）を見出させるために働いたのに対し、〈理性（知性）〉で〈絶望〉を追放したり、無視させたりしたのではない。ましてヴェューユにいう〈真理〉は〈この世界〉や「あの世界」にあるとされても、〈理性（知性）〉で求められるのではない。その点〈理性（知性）〉を働かせても、「あの世界」の〈絶対（神）〉をわたしに示し得ないと述べたボーヴォワール（の思想）に共通する。そうではなく、まさに今の自分が〈絶望〉に、別言すると〈不幸〉にとどまることなのだ。〈不幸〉にとどまるは〈この世界〉と「あの世界」とを結ばせる。だから今の自分なしに、きたるときでもない、今の〈絶望（不幸）〉はほかの誰でもない自分にしか受け止められないし、受け入れられないにちがいないのだ。これこそヴェューユにいう〈存在理由（意味）〉であり、ボーヴォワール、サルトルやハイデッガーたる、周知の無神論的実存主義者の思想とは別の思想になるのである。

一に、その〈理性（知性）〉を大いに活用させて止まない実存主義者たちの思想に当然ヴェューユのいう〈思惟と行動の関係〉を当てはめてみることができる。たとえばサルトルでは、〈思惟〉は〈理性（知性）〉で産出される能力であり、〈行動〉は身体を動かし利用するところでの、〈この世界（他者）〉への〈投企〉や〈参加〉を意味させよう。だからこれらの〈関係〉は〈精神（意識）と身体の関係〉に換言され得るし、筆者にいう「静の行動と動の行動の関係」であることにもなる。ただ「静の行動」は「動の行動」と同様、〈行動〉の名称ゆえに〈能動〉の役割を受け持つ〈思惟する〉になるからして、彼女に記される〈思

惟〉とはこの〈思惟する〉の〈受動〉能力とみる以外なく、しかもその〈思惟〉が〈行動〉と同時に生じることを除外していうと、サルトルに語られる、〈投企〉や〈参加〉なる〈行動（動の行動）〉の方はたえず〈思惟（受動）〉に出発し促されて〈行動〉せざるを得ない〈関係〉にあるほかなくなるのであって、〈関係〉をして〈行動（動の行動）〉を真先に優先させるのではない、つまり〈思惟〉が〈行動〉に依拠されて生まれる〈思惟〉でなくなるということだ。そのうえヴェーユのいう〈思惟（する）〉が身体に関係しないとされる点を踏まえて、サルトルにも当てはまろう「〈思惟〉に出発し促され」た〈行動〉についていえば、これらはどうなるかを、はたまた〈思惟（する）〉や〈行動〉でそれぞれ産出されよう精神（意識）や身体の〈感覚〉とその〈感情〉はどうなるかを、筆者がヴェーユを明らかにすべき次号以降にて彼を持ち出し語らせる〈他者〉や〈理性（知性）〉とともに、さらなる問題として質しておかなければならないのである。

一に、〈真理の王国（超越的な王国）〉はたとえばプラトンや正統キリスト教にいわれる「あの世界（超自然的な領域）」をさす表現であろうし、14歳のヴェーユはその〈真理の王国に入り込むことを確信した〉というが、しかしかかる〈確信した〉は筆者にとって、そこに〈入〉れることをたんに〈確信した〉にすぎないとみえるだけであって、彼女が実際〈入〉ったとは受け止められない。そのうえ〈わたしはその頃、福音書を読んでいなかった〉のに、かつ〈わたしは全生涯にあって、いかなるときにも、神を探し求めることはなかった〉⁽²⁹⁾のに、〈確信〉だけはできたわけである。そして後日の、工場体験や、何度かのキリスト教的宗教体験によって、彼女はもはや〈確信〉にとどまることなく、〈真理（神）が住まう超越的な王国〉に〈入〉ったことも事実であった。だがこの事実に対して、14歳の時点で〈確信した〉〈真理〉は彼女が学（数学）に秀でる〈兄〉の見出した〈真理〉に見習い、かの「博覧強記」を課してみつけられた〈真理〉にすぎないと察知される。だから彼女に求められたは、〈内的暗夜〉を乗り越える勉励であり、〈真理〉を尋ねるために発揮される〈理性（知性）〉の能力であって、後段で問うような〈真理を望〉む（*désirer*）ことではなかった。つまり14歳当時はこの〈望〉むにより、〈真理の王国〉に〈入〉るのを実現させたのでは

なく、これを〈確信した〉というわけである。〈真理〉を〈確信した〉はもとより〈理性（知性）〉の〈判断する〉能力であろうが、この〈理性（知性）〉はしかし、彼女をして当の能力を行使させ、いくら刻苦勉励し粉骨碎身せしめようとも、〈真理の王国〉に〈入〉らす原動力になり得ない（むろんそこに〈入〉りたくなくば、そのための辛苦を味わう必要もなからう）だけか、〈真理を望〉む能力に充当しないことは確かである。

一に、とはいえヴェーユにとって〈真理の王国〉はむろんのこと、〈真理〉とは何かを確認することにある。彼女は例の引用文に、〈真理という名前に、わたしは美、徳（力）とあらゆる種類の善をも含めていた〉と書き残す。ここから筆者は、彼女にあって〈真理の王国（あの世界）〉に〈住まう〉とされる、いかなる〈真理〉も〈この世界〉で掴めぬども、〈この世界〉の人間（彼女）が〈この世界〉を通してみられる〈美、徳（力）とあらゆる種類の善〉を〈望〉まずに、〈真理の王国（超越的な王国）〉に〈入〉ることも、各〈真理〉に触れることもできないであろうと読む。要するに、〈この世界〉で〈望〉み得る〈真理〉のすべてが「あの世界」とかかわる、別言すると「あの世界」の〈真理〉のすべてが〈この世界〉に放棄され、重力（必然性）としてあらわれくるということである。だから彼女が〈真理を望〉むことによって、その〈真理〉に接触したといえるならば、それは「あの世界」たる〈真理の（超越的な）王国〉に〈入〉り、〈真理〉と一体になったことを示唆させるにちがいない。

【続】

註

- (1) シモーヌ・ド・ボーヴォワールの一連の自伝的作品は、邦訳題名での、『娘時代(Mémoires d'une jeune fille rangée)』(1958年), 『女ざかり(La Force de l'âge)』(1960年), 『ある戦後(La Force des choses)』(1963年)と『決算のとき(Tout compte fait)』(1972年)である。諸作品は Gallimard から刊行される。
- (2) Simone de BEAUVOIR 《Mémoires d'une jeune fille rangée》(Gallimard) P.P. 330-331
- (3) Ibid., P. 330
- (4) Ibid., P. 179
- (5) Ibid., P.P. 243-244 と傍点以降 P. 263
- (6) 拙論「シモーヌ・ヴェーユの哲学とは何か〔補〕」(新潟大学大学院「フランス文化」研究, 第1号, 2008年) P. 21参照
- (7) Simone de BEAUVOIR 《Mémoires d'une jeune fille rangée》(Gallimard) 〈Le bonheur en revanche, je l'avais connu, je l'avais toujours voulu.〉 P. 272
- (8) Ibid., 〈L'histoire ne m'intéressait pas (歴史はわたしの興味を惹かなかった)。〉 P. 317 序でに, 〈la philosophie les (questions sociales) dédaignait. A la Sorbonne, mes professeurs ignoraient systématiquement Hegel et Marx; dans son gros livre sur 《le progrès de la conscience en Occident》, C'est à peine si Brunschvicq avait consacré trois pages à Marx, qu'il mettait en parallèle avec un penseur réactionnaire des plus obscurs. Il nous enseignait l'histoire de la pensée scientifique, ... (哲学は社会問題を軽蔑無視した。ソルボンヌ大学では, わたしの教授たちはこぞってヘーゲルやマルクスに知らぬふりをしていた。ブランシュヴィックの分厚い本『西洋における良心の進歩』で, 彼はマルクスにせいぜい三頁ほど割いたが, それも無名の反動思想家と並べ載せた。ブランシュヴィックは科学思想の歴史をわたしたちに教えた。〉とされたことは, 左翼的思想に興味を持ったヴェーユにすれば, ブランシュヴィックの授業に物足りなさや不満を感じていたであろう。P. 318
- (9) Ibid., 〈Je préférais la littérature à la philosophie.〉 P. 288
- (10) Ibid., 〈Pendant plusieurs années, je me fis le docile reflet de mes parents.〉 P.P. 44-45
- (11) Ibid., 〈Il (Brunschvicq) me conseilla de traiter le concept chez Leibniz, et j'acquiesçai. (ブランシュヴィックはライプニッツの概念を論じるように勧めた

- し、わたしはその言に従った。) P.369
- (12) Ibid., 〈J'étais incapable d'imaginer le malheur.〉 P.44
- (13) Ibid., P.58
- (14) Ibid., 〈je me sentais investie par la présence de Dieu.〉 P.58
- (15) Ibid., P.190
- (16) Ibid., P.197
- (17) Ibid., P.P.258-259
- (18) Ibid., 〈(Ainsi) reléguai-je Dieu hors du monde. (括弧内は筆者)〉 P.58
- (19) Ibid., 〈j'ai toujours trouvé la réalité plus nourrissante que les mirages.〉 P.65
- (20) Ibid., 〈je pensais sincèrement qu'il valait mieux être mort que vivant.〉 P.292
- (21) Ibid., 〈mon évolution〉 P.58
- (22) Ibid., 〈je n'existais que par moi, et pour moi.〉 P.264
- (23) Ibid., 〈me perfectionner, m'enrichir, et m'exprimer dans une œuvre qui aiderait les autres à vivre〉 P.265
- (24) Ibid., 〈Mon chemin était clairement tracé.〉 P.265
- (25) Ibid., 〈je me demandai si, par-delà les limites de la raison, certaines expériences n'étaient pas susceptibles de me livrer l'absolu.〉 P.362
- (26) Ibid., 〈Sartre voulait faire ma connaissance: il me proposait un rendez-vous pour un soir prochain〉 P.463
- (27) Simone WEIL 《Attente de Dieu》(Fayard) 中の《LETTRE IV Autobiographie spirituelle》P.P.38-39
- (28) 『校本 宮澤賢治全集』(筑摩書房)第14巻(年譜)P.592(本文は、宮澤賢治が1926年1月30日から3月23日までに11回に亘って、『農民芸術論』と題しては5回、続いて『農民芸術概論』として講義した際の、6回目に書写された文章であると記される)参照
- (29) Simone WEIL 《Attente de Dieu》(Fayard) 中の《LETTRE IV Autobiographie spirituelle》〈(Je peux dire que) dans toute ma vie je n'ai jamais, à aucun moment, cherché Dieu.〉 P.36